

**本部企画シンポジウム****■** 2022年8月31日(水) 16:20 ~ 18:10 | **■** 第1会場 3号館3階301教室**本部企画シンポジウム1／「総合知を支える学会」を目指して**

コーディネーター：伊坂 忠夫（立命館大学）、一階 千絵（群馬県立女子大学）

今回のメインテーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学」を支え、推進する本学会の今後の方向性について以下の点から議論し、今後の発展につなげるシンポジウムとしたい。その一つは、学会本来の持つ文理横断の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強みは何か。2つめとして、老若男女の別だけでなく、様々な分野・考え方の者が集まる本学会は、まさにダイバーシティ環境の中で、体育、スポーツ、健康を議論できる学会であり、「発想のダイバーシティ」からwell-beingへとつなげていく学会の姿を示せないか。3つ目として若手の学会員からみて、「総合知を生み出す学会」の良さは何か、また総合知を生み出せる研究者は、大学や研究機関にとってどのような魅力になるのかについて、学会員のキャリアの観点から本学会の強み、魅力は何かについても議論したい。以上の論点を中心に、今後の本学会の方向性、展望について学会員の皆さんと議論を深めるシンポジウムとしたい。

**[本部企画-S1-1] 日本学術会議健康・スポーツ分科会の活動**\*宮地 元彦<sup>1</sup> (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)**[本部企画-S1-2] 総合知を生み出すための準備と実践**\*萩原 悟一<sup>1</sup> (1. 九州産業大学)**[本部企画-S1-3] 総合知の創造のためのダイバーシティとは**\*金谷 麻理子<sup>1</sup> (1. 筑波大学)

## 本部企画シンポジウム

### 本部企画シンポジウム 1 / 「総合知を支える学会」を目指して

コーディネーター：伊坂 忠夫（立命館大学）、一階 千絵（群馬県立女子大学）

2022年8月31日(水) 16:20 ～ 18:10 第1会場 (3号館3階301教室)

今回のメインテーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学」を支え、推進する本学会の今後の方向性について以下の点から議論し、今後の発展につなげるシンポジウムとしたい。その一つは、学会本来の持つ文理横断の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強みは何か。2つめとして、老若男女の別だけでなく、様々な分野・考え方の者が集まる本学会は、まさにダイバーシティ環境の中で、体育、スポーツ、健康を議論できる学会であり、「発想のダイバーシティ」からwell-beingへとつなげていく学会の姿を示せないか。3つ目として若手の学会員からみて、「総合知を生み出す学会」の良さは何か、また総合知を生み出せる研究者は、大学や研究機関にとってどのような魅力になるのかについて、学会員のキャリアの観点から本学会の強み、魅力は何かについても議論したい。以上の論点を中心に、今後の本学会の方向性、展望について学会員の皆さんと議論を深めるシンポジウムとしたい。

### [本部企画-S1-1]日本学術会議健康・スポーツ分科会の活動

\*宮地 元彦<sup>1</sup> (1. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

<演者略歴>

鹿屋体育大学卒業、同大学院修士課程終了後、川崎医療福祉大学健康スポーツ学科、国立健康・栄養研究所を経て、現職。専門分野は、運動生理学、健康スポーツ科学。厚生労働省の身体活動基準の策定や国民健康・栄養調査の企画・検討のための検討会委員、日本学術会議会員。

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野の約87万人の科学者を内外に代表する機関であり、210人の会員と約2000人の連携会員によって職務が担われている。設立から73年を経て、現在は第25期（1期3年）の活動が進められている。第二部（生命科学系）の健康・生活科学委員会の中に、健康・スポーツ科学分科会が設置され、現在13名の委員により活動している。近年では、スポーツ庁長官からの審議依頼に対する回答「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」や、提言「子どもの動きの健全な育成をめざして～基本的動作が危ない～」などを表出してきた。健康・スポーツ分科会は第二部に所属しているが、人文・社会系、生命科学系、理学工学系を専門とする幅広い研究分野の会員、連携会員が所属し、共同して活動が続けている。本発表では、日本学術会議における健康・スポーツ科学分科会がこれまでに進めてきた活動を紹介することで、本シンポジウムのテーマ「『総合知を支える学会』を目指して」の議論の活性化に貢献できればと考えている。

---

本部企画シンポジウム

## 本部企画シンポジウム 1 / 「総合知を支える学会」を目指して

コーディネーター：伊坂 忠夫（立命館大学）、一階 千絵（群馬県立女子大学）

2022年8月31日(水) 16:20 ～ 18:10 第1会場 (3号館3階301教室)

今回のメインテーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学」を支え、推進する本学会の今後の方向性について以下の点から議論し、今後の発展につなげるシンポジウムとしたい。その一つは、学会本来の持つ文理横断の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強みは何か。2つめとして、老若男女の別だけでなく、様々な分野・考え方の者が集まる本学会は、まさにダイバーシティ環境の中で、体育、スポーツ、健康を議論できる学会であり、「発想のダイバーシティ」からwell-beingへとつなげていく学会の姿を示せないか。3つ目として若手の学会員からみて、「総合知を生み出す学会」の良さは何か、また総合知を生み出せる研究者は、大学や研究機関にとってどのような魅力になるのかについて、学会員のキャリアの観点から本学会の強み、魅力は何かについても議論したい。以上の論点を中心に、今後の本学会の方向性、展望について学会員の皆さんと議論を深めるシンポジウムとしたい。

---

### [本部企画-S1-2]総合知を生み出すための準備と実践

\*萩原 悟一<sup>1</sup> (1. 九州産業大学)

<演者略歴>

米国アーカンソー州立大学大学院修了（M.S. Sports Administration）、九州工業大学大学院生命体工学研究科脳情報専攻短縮修了（博士（学術））。国立大学法人鹿屋体育大学大学院准教授を経て現職。専門はスポーツマネジメント。その他、株式会社リトルソフトウェア顧問、スポーツ庁長官賞などの受賞歴。

人文・社会科学、および自然科学を含むあらゆる「総合知」により、社会の課題を解決するために様々な取り組みが行われている。私は「総合知」を生み出すためにスポーツ科学の若手研究者の立場から何を準備するべきか、または実践することができるのかを考えながら教育・研究・社会貢献に寄与するための努力を重ねている。学位を取得した研究内容を発展させることは基より、Beyond 5G、メタバース、XRの時代でスポーツをさらに発展させるために異分野の研究領域から新たな学びを得るための挑戦を続けている。30代の若手研究者という立場を活かし、失敗を恐れない実践を続け、40代、50代には総合知を生み出す立場になれるような研究者になることを目指したい。本学会では若手研究者が失敗を恐れずに実践している初学者「総合知」の事例と今後の展望について語り、学会員の皆様と様々な議論をしたい。

## 本部企画シンポジウム

### 本部企画シンポジウム 1 / 「総合知を支える学会」を目指して

コーディネーター：伊坂 忠夫（立命館大学）、一階 千絵（群馬県立女子大学）

2022年8月31日(水) 16:20 ～ 18:10 第1会場 (3号館3階301教室)

今回のメインテーマである「総合知を生み出す体育・スポーツ・健康科学」を支え、推進する本学会の今後の方向性について以下の点から議論し、今後の発展につなげるシンポジウムとしたい。その一つは、学会本来の持つ文理横断の強み、ならびに他の学会にない身体についての総合知を生み出す学会の強みは何か。2つめとして、老若男女の別だけでなく、様々な分野・考え方の者が集まる本学会は、まさにダイバーシティ環境の中で、体育、スポーツ、健康を議論できる学会であり、「発想のダイバーシティ」からwell-beingへとつなげていく学会の姿を示せないか。3つ目として若手の学会員からみて、「総合知を生み出す学会」の良さは何か、また総合知を生み出せる研究者は、大学や研究機関にとってどのような魅力になるのかについて、学会員のキャリアの観点から本学会の強み、魅力は何かについても議論したい。以上の論点を中心に、今後の本学会の方向性、展望について学会員の皆さんと議論を深めるシンポジウムとしたい。

### [本部企画-S1-3]総合知の創造のためのダイバーシティとは

\*金谷 麻理子<sup>1</sup> (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系准教授。鹿屋体育大学を経て筑波大学に着任、現在に至る。筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻修了。専門は体操競技、スポーツ運動学。大学における体育実技の授業、競技スポーツや社会体育の現場において日々多様な人材に関わっている。本学会ダイバーシティ委員会委員長。

体育・スポーツ・健康分野におけるダイバーシティとはいかなるものなのか、ダイバーシティを促進するためにはどうすべきなのか、ダイバーシティの促進によって得られるメリットは何か。これらは筆者が昨今、様々な組織に属する中で、ことあるごとに会える問いである。一方で、本分野は、老若男女、多種多様な人々が集うことから、そもそもダイバーシティの最たるものであり、まさしく「総合知」の宝庫であるとも考えられる。とすると、本分野がこのダイバーシティ環境を有効活用し、より社会の発展に貢献しうるのはどのようにすべきなのだろうか。筆者は、日々、大学の体育教員として非専門・専門学生、大学院生（修士、博士）と関わり、体操競技のコーチやマネージャーとして競技スポーツや社会体育の現場でジュニア、学生、日本代表など多様な選手や指導者たちと関わっている。つまりは、日常的にダイバーシティ環境にすでに身を置いているといえる。今回はこのような自身の活動を事例として、「総合知」創造のためのダイバーシティについて考えてみたい。この発表をきっかけに本テーマについて皆様と議論を深めていければ幸いである。